

Next YOKOHAMA

第384回横浜定期演奏会 ～一時代の終焉 一時代の始まり～

2023年1月28日(土) 17:00 横浜みなとみらいホール

指揮: カーチュン・ウォン [首席客演指揮者]

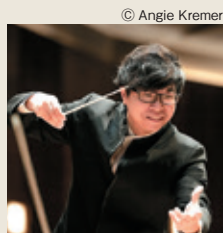
ピアノ: 小菅 優

ラフマニノフ:

ピアノ協奏曲第3番 二短調 op.30

ラフマニノフ:

交響曲第2番 ホ短調 op.27



© Angie Kremer



© Takehiro Goto

カーチュン・ウォン

小菅 優

S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C ¥5,000 P ¥4,000 Ys (25歳以下) ¥1,500

※ Ys席はS席以外から選べます。

※車いすおよび障害者手帳をお持ちの方は、サービスセンターへお問い合わせください。

好評発売中!

第399回名曲コンサート

2023年1月15日(日) 14:00

サントリーホール

指揮: カーチュン・ウォン [首席客演指揮者]

ギター: 村治佳織

ロドリゴ: アランフェス協奏曲

ベートーヴェン: 交響曲第3番《英雄》



© Angie Kremer



© Ayako Yamamoto

カーチュン・ウォン

村治佳織

SS¥8,000 S ¥7,000 A ¥5,500 B ¥5,000 C ¥4,500 P ¥4,000 Gs (65歳以上) ¥4,000

Ys (25歳以下) ¥1,500

※文化庁子供文化芸術活動支援事業

日本フィル & サントリーホール とっておきアフタヌーン Vol.21

2023年2月1日(火) 14:00 サントリーホール

指揮: 広上淳一 [フレンド・オブ・JPO (芸術顧問)]

サクソフォン: 上野耕平* ナビゲーター: 高橋克典

ドリーブ: バレエ組曲《シルヴィア》より 第4曲「バッカスの行進」

ミヨー: 《スカラムージュ》 op.165c*

ピアソラ: 《エスクアロ (鯨)》* / 《オブリビオン (忘却)》* / 《リベルタンゴ》*

☆ハチャトゥリヤン: バレエ組曲《ガイース》より

☆ビゼー: 組曲《アルルの女》第2番

☆後半の2曲は上野耕平がオーケストラメンバーとしてサクソを演奏いたします。



© S. Ohsugi

上野耕平

S ¥5,500 A ¥4,400 B ¥3,300



人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。
JAPAN
PHILHARMONIC
ORCHESTRA
——創立指揮者 渡邊 暁雄——

日本フィルハーモニー交響楽団
JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

第383回

横浜定期演奏会

383rd YOKOHAMA Subscription Concert

2022年12月17日(土) 午後5時開演

横浜みなとみらいホール

5:00pm, December 17th (Sat), 2022 at Yokohama Minato Mirai Hall



主催: 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援: 神奈川新聞、+tvk

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会



「オーケストラ曲は闘い続ける」

日本フィル主催の「第九」演奏会を初めて指揮する太田をはじめ、若手を中心としたキャストでの上演となる。ベートーヴェン晩年の傑作であると同時に、幕開けに演奏される壮年期の代表作《エグmont》序曲と同様、彼の特徴である「闘争を経て勝利へ至る」理念が刻印された1曲に他ならない。そうした若き日の血が彼の中に蘇ったのも、1つにはこの作品が、幾人もの人々が1つの世界を創り上げるオーケストラのためのものであったからだろう。そうなのだ、まさしく「オーケストラ曲は闘い続ける」！

Programs

ベートーヴェン：

《エグmont》序曲 op.84 (約9分)

Ludwig van BEETHOVEN: Overture from "Egmont" op.84

—— 休憩 (15 分) Intermission ——

ベートーヴェン：

交響曲第9番《合唱》ニ短調 op.125 (約70分)

Ludwig van BEETHOVEN: Symphony No.9 "Choral" in D-minor, op.125

指揮：太田 弦 Conductor: OHTA Gen

ソプラノ：盛田麻央 Soprano: MORITA Mao

アルト：杉山由紀 Alto: SUGIYAMA Yuki

テノール：樋口達哉 Tenor: HIGUCHI Tatsuya

バリトン：黒田祐貴 Baritone: KURODA Yuki

合唱：東京音楽大学 Chorus: Tokyo College of Music

コンサートマスター：田野倉雅秋 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: TANOKURA Masaaki, JPO Solo Concertmaster

ソロ・チェロ：菊地知也 [日本フィル・ソロ・チェロ]

Solo Violoncello: KIKUCHI Tomoya, JPO Solo Violoncello

Profile

© ai ueda



指揮：太田 弦

1994年北海道札幌市に生まれる。幼少の頃より、チェロ、ピアノを学ぶ。

東京藝術大学音楽学部指揮科を首席で卒業。学内で安宅賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。同大学院音楽研究科指揮専攻修士課程を卒業。

2015年、第17回東京国際音楽コンクール〈指揮〉で2位ならびに聴衆賞を受賞。

指揮を尾高忠明、高関健の両氏、作曲を二橋潤一氏に師事。山田和樹、パーヴォ・ヤルヴィなどの各氏のレッスンを受講する。これまでに読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、九州交響楽団、岡山フィルハーモニック管弦楽団などを指揮、今後さらなる活躍が期待される若手指揮者筆頭。2019年4月から2022年3月まで大阪交響楽団正指揮者を務めた。

2021年2月、オクタヴィア・レコードより交響曲第8(9)番ハ長調 D944「ザ・グレイト」(新日本フィルハーモニー交響楽団公演ライブ収録)をリリース、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言開けに行われた公演の緊張感の中、太田のエネルギー溢れる「グレイト」が聴衆の話題をさらった。

2023年4月より仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者に、そして、2024年4月より九州交響楽団首席指揮者に就任。

横浜定期演奏会では、目の不自由なお客様のために点字プログラムを用意しております。ご要望の方は主催受付までお申し出ください。

お客様へのお願い

演奏中はお手持ちの時計のアラーム、または携帯電話などの電源はお切りください。手荷物、傘、チラシ類などの物音、話し声などで他のお客様のご迷惑にならないようご配慮をお願い申し上げます。尚、録音、録画、演奏中の写真撮影は固くお断りしております。

感染防止にご協力をお願いいたします

●スタッフは不織布マスクを正しく着用します。また、小声で対応させていただきます。●入場時の手指消毒、手洗い、検温をお願いいたします。●ホール内ではマスク(不織布など効果の確かなもの)を正しく着用し、周囲のお客様への配慮をお願いいたします。●開演前はなるべくお席でお過ごしください。また時差退場のご協力をお願いいたします。●会場ロビーでの食事はお控えください。(ホール内は飲食禁止です)●ブラボー等の掛け声はお控えください。ホール内では大声での会話を避けるようご協力をお願いいたします。●出演者へのプレゼント(お手紙・お花などを含む)、面会、楽屋入り待ち、出待ち等はご遠慮ください。●万が一感染者が発生した場合など、必要に応じて保健所等の公的機関へお客様の氏名と連絡先を提供する可能性がございます。



ソプラノ: 盛田麻央

国立音楽大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所修了。パリ・エコール・ノルマル音楽院首席、パリ国立高等音楽院修士課程を最優秀の成績で修了。これまでオペラでは、二期会《ドン・ジョヴァンニ》ツェルリーナ、同《メリー・ウィドー》ヴァランシェンヌ、日生劇場《ルサルカ》等出演。2021年宮本亞門演出による二期会《魔笛》パミーナでは、表現豊かな演唱で観客を魅了した。またコンサートでもT. フィッシャー指揮メンデルスゾーン「真夏の夜の夢」、P. ダイクストラ指揮ハイドン「天地創造」、K. ウルバンスキ指揮オルフ「カルミナ・ブラーナ」の他、モーツァルト「レクイエム」、マーラー「交響曲第4番」等のソリストとしても活躍。二期会会員。



メゾソプラノ: 杉山由紀

武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所修了時に最優秀賞・川崎静子賞・所長賞受賞。2015年《ヘンゼルとグレーテル》ヘンゼルでオペラデビュー後、二期会ニューウェーブ・オペラ《ジュリオ・チェザレ》タイトルロール、日生劇場《コジ・ファン・トゥッテ》ドラベッラ、びわ湖ホール《神々の黄昏》ヴェルグンデ、二期会《ナクソス島のアリアドネ》作曲家、《サロメ》ヘロディアスの小姓、《ルル》劇場の衣裳係／ギムナジウムの学生、「ガラスの仮面」を原作とした歌劇《紅天女》等にも出演し、いずれも好評を博す。「第九」をはじめ、ヘンデル「メサイア」、メンデルスゾーン「エリア」、バッハ「ロ短調ミサ」等のソリストを務める。二期会会員。



テノール: 樋口達哉

武蔵野音楽大学大学院修了後に渡伊。E. カルソー国際声楽コンクール（ミラノ）最優秀賞。1998年ハンガリー国立歌劇場《ラ・ボエーム》でデビュー後、99年ムーティ指揮《運命の力》でミラノ・スカラ座に出演する他、メトロポリタン歌劇場管弦楽団等と共演。ミラノ大聖堂、ヴァチカン等のコンサートでも成功をおさめる。国内では二期会、新国立劇場、日生劇場、びわ湖ホール等に主演する他、「題名のない音楽会」「NHKニューイヤー・オペラ」等でも活躍。2021年二期会《サムソンとデリラ》、22年二期会《エドガール》、自身プロデュース《道化師》でそれぞれタイトルロールを演じ高評を得る。23年には二期会《トゥーランドット》カラフで出演予定。二期会会員。



バリトン: 黒田祐貴

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。公益財団法人青山財団奨学生。学部在籍中に安宅賞、卒業時に大賀典雄賞・松田トシ賞等受賞。宗次徳二特待奨学生。大学院修了時に大学院アカンサス音楽賞受賞。武藤舞奨学金を受け、Chigiana 音楽院でディプロマ取得。第20回東京音楽コンクール第3位。第87回日本音楽コンクール声楽部門第2位、岩谷賞受賞。日本コロムビアよりCD「Meine Lieder」をリリース。兵庫県立芸術文化センターのオペレッタ《メリー・ウィドウ》ダニロ役でオペラ・オペレッタデビュー後、アントネッロ主催オペラ《ジュリオ・チェザレ》アキッラ役、NISSAY OPERA 2022《セビリアの理髪師》フィガロ役等出演。コンサートでは「クラシック・キャラバン 2022」、NHK-FM「リサイタル・パッショ」等出演。



合唱: 東京音楽大学

東京音楽大学合唱団は「合唱」授業科目の履修者から選抜された学部生と声楽専攻の大学院生を中心に構成する混声合唱団で、国内外の著名オーケストラと数多くの共演を果たしている。日本フィルハーモニー交響楽団との共演は、「第九」を始めて1979年以來40年以上の歴史を持つ。2020年と21年の共演においては感染症対策に伴い合唱団の人数が大幅に制限される中、同楽団と今までにない「第九」の歓喜を表現することができた。他に18年にサンクトペテルブルクフィルハーモニー交響楽団「イワン雷帝」、19年にNHK音楽祭、21年6月に「めぐろで第九 2020+1」に出演。合唱指導は22年度より、志村文彦、藤牧正充、浅井隆仁の各氏に加え、フレンドリー・アドバイザーとして広上淳一氏を迎える。



今日のコンサートの聴きどころは？

ヨーロッパ文化史研究家小宮正安さんの面白解説をお楽しみください！

16時20分
より
大ホール内
にて♪



小宮正安（こみや まさやす）●ヨーロッパ文化史・ドイツ文学研究家。横浜国立大学（大学院都市イノベーション学府・都市科学部）教授。著書に『コンスタンツェ・モーツァルト〈悪妻〉伝説の虚実』（講談社選書メチエ）、『名曲誕生 時代が生んだクラシック音楽』（山川出版社）、『音楽史 影の仕掛人』『オーケストラの文明史 ヨーロッパ3000年の夢』（春秋社）、『モーツァルトを「造った」男 ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社現代新書）、『愉悦の蒐集 ヴンダーカンマーの謎』（集英社新書）など多数。『ウィーンフィル・ニューイヤーコンサート』でのコメンテーターをはじめテレビやラジオへの出演、『東京・春・音楽祭』でのナビゲーターなど、幅広い分野で活躍している。

ベートーヴェン：《エグモント》序曲 op.84

「ゲーテの悲劇『エグモント』への大オーケストラのための序曲」が正式名称。舞台劇『エグモント』がウィーンで上演された際、その付随音楽(つまり一種の劇伴)としてルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が作曲した。序曲を含め全10曲から成り、1809年10月から翌1810年6月初旬にかけて作られている。

スペインの圧政に苦しむオランダを舞台とするこの物語は、領主エグモント伯爵が祖国独立運動の指導者として立ち上がり、捕らえられて処刑されるまでを描く。またそうした内容を凝縮して表現したのが、この序曲に他ならない。スペインの民族舞踊であるファンダンゴが、恐ろしい威圧感を以て迫る序奏部。それに続いて、エグモントの戦いや愛を暗示するかのような主部が始まるが、最後には彼の逮捕と処刑が描かれる。だがここで曲は終わらず、「勝利の交響曲」とも呼ばれる輝かしい終結部が続き、死をもって達成された英雄の勝利が謳い上げられる。

楽器編成 フルート2(ピッコロ持替1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

ベートーヴェン：交響曲第9番《合唱》ニ短調 op.125

ゲーテと並び称される、ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラー(1759-1805)、その彼が書いた頌歌「歓喜に寄す」が生まれたのは1785年であり、4年後にはフランス革命が勃発する。このようにヨーロッパ全体が激動の時代を迎えた最中に青春時代を過ごしたベートーヴェンは、フランス革命の掲げる“自由・平等・友愛”の理想に共鳴する。そしてやがて、「歓喜に寄す」に基づいて曲を作るという構想を抱くようになった。

交響曲第9番(通称「第九」)創作のスケッチがベートーヴェンの作曲ノートに現れ始めるのは1818年頃のこと、早くも第1楽章の断片がそこに見られる。ただしその後しばらくは、「荘厳ミサ」など他の大作に没頭。4年間の空白期間を経た1822年頃に再着手し、翌23年には第1楽章から第3楽章までの主要な楽想を整え、1824年2月中旬までには全曲を完成した。なお全曲完成のほぼ半年前に、それまで別構想として持っていた「歓喜に寄す」のカンタータを、交響曲の終楽章に加えることを決め、現在のような形になった。

ここに着想から約6年、「歓喜に寄す」を音楽化するという構想から数えれば実に約30年を費やしたベートーヴェンの畢生の大作「第九」が誕生した。しかもそれは、“合唱付交響曲”という、当時としてはかなり珍しい形の交響曲となった。「交響曲」は元々、器楽の「響き交わし(Sym-phonía)」という意味合いから生まれた言葉だが、この「第九」をもって交響曲は、声楽をも含んだ器楽作品としての新たな可能性を得ることとなる。

なお初演の際、すでに聴覚を失っていたベートーヴェンにはこの作品を完全に指揮することは不可能だった。しかし彼はあくまでも自作自演の意思を捨てなかったため、補助指揮者としてウィーンの宮廷楽長ウムラウフが立ち、その結果ステージの上には2人の指揮者が現れるという、前代未聞のステージとなった。さらにリハーサルは2回しかおこなわれず、独唱者も男声が直前に交代、オーケストラや合唱は宮廷劇場付属の音楽家と音楽愛好家の臨時混合編成など、初演そのものの質については決して高くなかった模様である。にもかかわらず、初演は熱狂的な反応を引き起こした。

フランス革命が起きてから30年あまり。革命の理想とは裏腹の厳しい現実が次々と世界を襲う中、それでも革命の精神を生涯にわたって守り続けたベートーヴェンとシラーの芸術的メッセージに、市民階級をはじめとする多くの人々が共感したからに他ならない。

第1楽章：アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウン・ポーコ・マエストロ、ニ短調。

冒頭の弦楽によるトレモロは、天地創造の混沌を思わせるように不安定に響く。その後第1主題が、激しく下降するニ短調の分散和音型として呈示された後、“歓喜の主題”を思わせる穏やかな第2主題が続く。この2つの主題が様々に切り結び合いながら楽章が展開を遂げた後、最後は英雄の死を思わせる葬送行進曲風の楽想が現れる。

第2楽章：モルト・ヴィヴァーチェ、ニ短調。

ベートーヴェンが得意としたスケルツォ楽章。外観は中間にトリオ部を持つ伝統的な三部形式だが、両端のスケルツォ主部それぞれ自体がソナタ形式(主題の呈示～展開～再現)という、凝った“入れ子構造”にもなっている。

第3楽章：アダージョ・モルト・エ・カンタービレ、変ロ長調。

瞑想的な第1主題と、アンダンテ・モデラート、ニ長調の第2主題が交互に現れる。厳しい表情の前2楽章に対し、ここの長大な楽章では、天国的な安息感が満ちる。

第4楽章：プレスト、ニ短調。

オーケストラのみによる序奏は、不協和音の爆発、そして低弦が奏でる朗唱風の重々しいメロディにより始まる。このメロディは前の3つの楽章の主題をすべて一第3楽章の安らぎをも一否定し、やがて“歓喜の主題”が姿を現す。続いて、件の朗誦風のメロディをバリトン独唱が歌い出し、これまで展開されてきた「器楽のみ」による交響曲のあり方をも否定。声楽と器楽の新たな響きが作られてゆく。死せる英雄が死後赴く楽園からやってきた喜びが、この世界に失われた自由や友愛をもたらすという、シラーの「歓喜に寄す」のメッセージ。それをベートーヴェンが音楽によって昇華させた、壮大なフィナーレである。

楽器編成 独唱ソプラノ、独唱アルト、独唱テノール、独唱バス、混声合唱(ソプラノ、アルト、テノール、バス)、ピッコロ1、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラ・ファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部。

Ode „An die Freude“ von Friedrich Schiller
フリードリヒ・シラー 頌歌 “ 歓喜に寄す ” より

歌詞対訳：小宮正安

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere
anstimmen und freudenvollere.
(L.v.Beethoven)

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng getheilt,
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!

Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.

Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig wie ein Held zum siegen!

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder - überm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.

Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahndest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt!
Über Sternen muß er wohnen.

おお友よ、このような音ではだめだ！
そうではなく、もっと快い音に
賛同しよう そしてもっと喜びに満ちた音に
(以上ベートーヴェン作詞)

喜び、それは美しい神々の閃光
死せる英雄が赴く楽園の世界の娘
私たちは足を踏み入れる、炎に酔いしれつつ
素晴らしいあなたの聖所へと
あなたの魔法は再び結びつける
世のしきたりが厳しく隔てていたものを
全ての人々は兄弟となる
あなたの柔らかな翼が憩うところ

大きな幸いを得た人、つまり
友を友とできた人
優しい妻を得た人は
その喜びを共にしよう！

そうだ、たとえたったひとつの魂であっても
自分のものと呼べるものを世界で持つ人は！
そしてそれができない者は、そっと立ち去るがよい
涙しながらこの集まりの外へ！

全ての存在は喜びを飲む
自然の乳房から
善人と呼ばれる人も、悪人と呼ばれる人も皆
ばらの道をゆく

喜びは私たちに接吻と葡萄酒とを与えてくれた
そして死の試練をのりこえた友も
快楽などは虫けらに与えてしまえ
そうすればケルビムが見えてくる、神の前に

朗らかに、創造主の恒星が飛翔するように
天の輝かしい運行の中を
進め、兄弟よ、君たちの行く道を
喜びに満ちて、勝利へ向かう英雄のように！

抱かれよ、数多の人々よ！
この接吻を全世界に
兄弟たちよ、星の輝く天幕の彼方には
慈愛に満ちた父がいるに違いない

ひざまずくか、数多の人々よ？
創造主を感じるか、世界よ？
その方を星の輝く天幕の彼方に探せ！
星の彼方にその方はおられるに違いない



Column

歴史でひもとく！ ～クラシックこぼれ話 by 小宮正安



「声楽>器楽」の価値観の転換

日本におけるクラシックの受容は、まずは「器楽曲」（その中にはオーケストラ曲も含まれる）から始まったため、少し想像しにくいかもしれない。だがヨーロッパでは…今でもそうだが…、オペラや声楽曲、宗教曲といった「声楽曲」が、「器楽曲」よりも目立つ形で取り上げられる。音楽雑誌を見ても、往々にしてまずはオペラの記事が真っ先に来て、次に器楽によるそれが続くほど。

なぜなのかといえば、そこにはキリスト教の影響を考えられる。キリスト教の聖典の聖書では、元々唯一絶対の神が声を発すると、光や大地や生物…つまりはこの宇宙が生まれた。なお人間についてだけは、神が自ら声を発して誕生させた大地からわざわざ土の塊をとり、それを「自分の姿に似せて」創造した。となると昔の人は、この聖書の箇所から、人間は神と同じような形をしているのだ、と考えるようになる。つまり人間の声は、神から与えられたもっとも聖なる尊いものに他ならない。だからこそ、人間が声を用いることは、神を讃える行為にも通じる。「声楽曲」がヨーロッパで重んじられる理由である。

いっぽう、人間の手についてはどうか？こちらは、神が普通の宇宙創造とは異なって、声ではなくわざわざ自身の手を用いて人間を作った…と、昔の人は考えた。となると、神が特別な技を駆使した手を、神そっくりの手を持つ人間がみだりに用いるのは、神の神秘的な創造の知恵を汚すものになりかねない。というわけで、人間の手から生み出される楽器や、そのために作られた「器楽曲」は、声楽曲よりも一段低く見なされてきた。

たしかにそうだろう。オペラがよい例だが、舞台の上で脚光を浴びるのは、声楽を司る歌手で、楽器を満載したオーケストラはその引き立て役として、薄暗いオーケストラピットに押し込められている。だがフランス革命等を経て、そうした古い価値観の転換が起きた。伝統的な「声楽>器楽」という構図も崩れ去り、オーケストラが舞台の上で脚光を浴びるようなオーケストラの演奏会が盛んになる。そして、声楽を従えた器楽曲＝声楽付きの交響曲も生まれるようになる。

ベートーヴェンの「第九」は、まさにそうした流れに掉さした存在に他ならない。彼が文字通り、革命の時代の子だったこともうなづける。



ウリッセ・カプート画『オペラ座の一夜』、オーケストラピットにひしめく大人数の器楽奏者と、舞台上で脚光を浴びる数少ない歌手との間に、「声楽>器楽」の伝統的価値観が現れている。

